

第35期小田原市図書館協議会第1回協議会 会議録

日 時：令和4年10月13日（木） 午前9時30分から午前11時40分まで

場 所：小田原市立中央図書館2階 研修室

- 1 開会
- 2 委嘱状 交付
- 3 教育長挨拶
- 4 委員自己紹介・職員紹介
- 5 委員長・副委員長選出
- 6 委員長・副委員長挨拶

委員長は野口武悟氏、副委員長は大塚さとみ氏に決定

7 報告事項

- （1） 令和3年度主要事業報告及び令和4年度主要事業について【資料1 4～5頁】

○説明省略

○質疑応答

副委員長：図書館の様々なイベントの幼稚園や小学校への周知は、学校を通してなのか、司書を通してなのか、どのようにPRをされているか。

石川副館長：子どもを対象にした事業については、市の教育委員会を通じて、学校や、市の関連するような社会教育施設にちらしを配布。そのほか広報、ホームページで案内している。

- （2） 電子図書館事業の開始について【資料1 7頁】

○説明省略

○質疑応答

馬見塚委員：今年度は1,000冊程度を導入し、今後、毎月100冊ずつ追加ということだが、電子図書は、買い取りなのか、それとも年間のライセンス料のような契約なのか。

植田副館長：買い取りのものと期限付きのものがある。

図書館長：電子図書には、貸し出し回数や、期間が決まっているものがあるので、期限付きの本であっても、人気のある本など、借りられる見込みがある場合には、ライセンスを継続するなど、貸し出し状況を見ながら対応していきたい。

馬見塚委員：蔵書を増やすのは、予算の関係もあって大変だと思うが頑張ってもらいたい。

図書館長：電子図書のライセンスの期限は出版社が決めているが、今後、環境が変わっていくので、状況を見ながら、蔵書数の増加に対応していく。

北河委員：利用者IDとパスワードは、図書館に連絡すれば、やり方を教えてくれるのか。

植田副館長：利用者IDは、図書カードの番号、パスワードの初期設定値は西暦の生年月日。

利用者の方が、システムにアクセスし、パスワードを変更する方法となっている。

委員長：8月に文部科学省から、公立図書館が導入する電子書籍サービスを、学校の1人1台端末で活用できるようにすることも有効との事務連絡が発出されているが、学校との連携はどのように考えているのか。

植田副館長：学校との連携は、とても重要と考えており、後程説明する「子ども読書計画」でも、重要性を認識して検討する内容になっている。予算の関係もあるが、配給会社の方では、読み放題パックもあるので、そういったものを取り入れていく。

8 協議事項

(1) 図書館運営のあり方について【資料1 8～11頁】

○事務局説明（資料に基づき佐次館長より説明）

○質疑応答

長谷川委員：10頁 5基本的な考え方に基づく取組の具体イメージ③の説明で、具体案はまだないとのことだが、どのように決めていくのか。

図書館長：勝沼図書館の成り立ちを見ると、図書館側からの仕掛けではなく、図書館に対して何が求められているのか、図書館にどのような情報があるかを、地域住民とコミュニケーションを取りながら、つくりあげた経緯がある。

本市の場合も、どういったニーズがあるのか、例えば、地域のお仕事されてる方が図書館に対してどういうニーズがあるのかは、現状ではまだ分かっていない。市民の方も個人の方だけではなく、会社を興したいと思っている方など、様々な方達といろいろなコミュニケーションを取りながら、資料を整理しまとめ、少しずつ積み上げていくことが必要だと思う。そういった意味で、コミュニケーションの仕様を、作っていききたい。これは、3の基本的な考え方に基づく取組の具体イメージで話した、多様な市民や団体が、図書館活動に主体的に関わる基盤に絡むことだが、図書館を使うことが想定される様々な方達とコミュニケーションを取りながら、徐々に形作っていったら良い。大枠のイメージは、そういった内容。

松本委員：9頁のデジタルミュージアムは、学校で子ども達が、それを見てぱっと小田原市のことを知ることができるのか。地域のことを調べる宿題があると、生徒はネットで調べて終わってしまうことがあるので、活用できるかと思ったのだが、いかがか。

小澤副部長：デジタルミュージアムは、国の事業補助を受けながら、今年度に完了する事業で、年度を越えても少しずつコンテンツを増やす予定だが、今年度は、今ある紙ベースのものを、アーカイブ、デジタル化して、登録していく作業がメインになる。そこでお尋ねの小学校や中学校の子ども達に対してどのような教材が出されるか

という話は、教育研究所と連携し、元々あった「わたしたちの小田原」とか、そういった本の内容ももちろんのこと、それ以外のコンテンツなども、先生方と協力しながら、順次デジタル化をして、学校の授業、若しくは学校の授業以外のところでも使えるように、コンテンツをたくさん入れていきたいと考えている。

図書館長：実際に見ていただくのは画像だが、その現物は市が収蔵しており、現物を全て見せることはできないが、現物を見たくなり、実際を見に行きたいといったきっかけ作りにもなることを期待している。また、普段、中々見せられないものをデジタル化して見せることができ、見せられる物については現物を見ていただくような働きかけにもなると思う。

委員長：デジタルミュージアムは、いつから公開を予定しているのか。

小澤副部長：デジタルミュージアムは、今まさにここで契約し、業者が順次コンテンツの登録作業を進めている。本だけではなく、出土した土器など全部で6万点ぐらいの文化財関係資料の登録を行う。今年度実施する、尊徳の生家の茅葺屋根のふき替えについては、作業風景をドローン使って撮影する。今まで見たことがないような資料や、なかなか公開されないような資料も、インターネット、パソコンを通じて、いとも簡単に見ることができるようになる。その作業を始めたところであり、今年度中に作り上げ、来年の4月オープンを目指している。

委員長：デジタルミュージアムと電子図書館サービスとの関係はどうなっているか。

図書館長：今年度、電子図書館サービスをスタートさせるにあたり、一般図書の電子書籍のほか、市が独自で公開できる領域を持っているので電子図書館で公開することを考えていた。

しかし、デジタルミュージアムの方が、高精細なデジタルデータを公開できることから、現物の質感を伝えたいようなものは、デジタルミュージアムを使っていきたいと考えている。図書館サイトで自由に載せられる領域については、改めて考え直しており、デジタルミュージアムと電子図書館は、相互に行ったり来たりができるようにリンクを貼りながら、うまく展開できるようにしたいと考えている。

勝川委員：電子図書館を使うときは、IDとパスワードが必要とのことだが、デジタルミュージアムの場合も、利用者のIDやパスワードが必要となるのか。

小澤副部長：オープンにするもの、しないものに分類するが、オープンにするものについては、誰でも見ることができるように、ID、パスワードなしにする予定。

委員長：10頁の6番の図は、あり方の骨子案全体を分かり易くまとめており、納得しながら拝見したが、こういう要素があったら良いのではないかと、気付いた点がある。6のところ、電子図書とかデジタル資料のことに繋がるが、この柱になっている資料のカテゴリーに、電子資料を位置付けたらいいかがか。それで、右上のデジタル

化と書いてあるが、資料カテゴリーとしてもあった方が良くと思う。それから、もう1つサービスの観点で言うと、左の上の方に児童サービスがあり、これは非常に大変重要だと思うが、一方で、ご高齢の方とか障がいのある方に対しての読書バリアフリーの視点も、益々重要になる視点だと思うので、その辺りを入れていただきたい。これは、ネットワークとかの話も入っているので、そこに含まれるのかも知れないが、学校図書館との連携のような、外の学校との繋がりも、入れていただけると良い。

図 書 館 長：ご意見ありがとうございます。電子資料については、電子図書館のデータベースで、新聞が検索できるなど、少しずつ充実させる必要がある。また、これからお仕事を始める方にとって、データベースの活用の幅がいろいろあるので、デジタル資料は意識付けをしていけたら良いと考えている。バリアフリーの視点については、子ども、高齢者、いろいろな観点はありますが、どのように表現するか、意識付けはしたい。学校図書館についてのイメージは、あとで計画を説明するが、大きく児童サービスの中で学校図書館との連携を位置付けたい。

（２）第三次小田原市子ども読書活動推進計画について【資料４】

○事務局説明（資料に基づき植田副館長より説明）

○質疑応答

北 河 委 員：ブックリストがとても大切だと最近思い始めた。ブックリストとは、他の方が紹介する本のリストだが、その人の価値観なので自分で探したいと思っていた。でも、特に読みたい本がなく、誰かのために本を選ぶことになった時に、膨大な図書館の本の中からどうやって選べば良いか、とても難しかった。

中高生の対象のブックリストを見て、こういう本が中高生には良いと思い、この中の何冊かピックアップして、知人に渡しとっても喜ばれた。ブックリストは、面白い本が、レベルとしては、中間以上の本がある、皆が喜ぶ本があることをすごく感じた。例えば、赤ちゃんを持つお母さんが、あまり絵本に親しみがないお母さんでも、ブックリストを読んで、こういう本が赤ちゃんに良いと分かると思う。

だから、ブックリストは、とても私は大事だと思う。図書館で、端の方にブックリストが積んでいるのはもったいない。それをもっとPRすると、より借りたい人や、興味ある人が増えると思う。

植田副館長：ブックリストについては、保護者の方や、学生さんと子どもさんの生の声を聞きながら、作れるように検討する。

勝 川 委 員：ブックリストに関する事で、施設等で配布はあるが、小さいお子さんがいるご家庭や若い子ども達は、ネットの社会なので、ホームページで公開すれば、皆さんに

使ってもらえると思う。乳幼児のいるご家庭も、スマホ1つでお母さんが見ることができ、子ども、中高生なんかは皆スマホを使っているので、検索して興味をもってもらえるのが一番良いと思う。また、電子書籍の導入に当たって、市のホームページの中にコンテンツは新たにできるのか。

植田副館長：ホームページにバナーを設け、電子書籍の方に飛ぶようにする予定。

勝川委員：拝見したが小田原市のホームページに、地味に、きっちりした感じで公開されている印象があるが、子どもや若い世代の子達には、ちょっと手を伸ばしにくいと感じる。東口図書館のホームページは、子どもさん達が見やすい感じになっているので、そういうところを真似て工夫していただいたら良い。

植田副館長：東口図書館のホームページにも、小田原市の電子図書館が始まりますと広告も上げている。今後も引き続き、東口図書館にもバナーをアップする。

図書館長：電子書籍のサイトに子ども達に見合うようなインターフェースをどう作るかについては、市のホームページは、市全体の行政のホームページなので、閲覧のしやすさを重視した統一規格で作成されているので、その枠組みの中で考えていく必要がある。

例えば、これから公開される電子書籍のサイトも専用サイトがあるが、一般的な検索のしやすさだとかで枠組みが決まっているので、その中で、どのように表現するかを工夫していきたい。それ以外にも、こういったところにこういったものがあるのか、気付いてもらえるように、いろいろな広報策を考えていく必要がある。例えば、SNSを中高生の方にフォローしてもらうことで繋げることも必要だと思う。図書館のツイッターは、まだ始めたばかりで、模索しながら、引き続き研究し仕掛けを考えていきたい。

委員長：中学とか高校を通して知ってもらえるようなやり方もあるような気がする。特にティーンズを想定した計画の位置付けでもあるのだから。

図書館長：先日、西湘高校の司書の先生から、小田原市が電子図書館を開始することを、学生達にPRしたいので、申し込みのための情報を提供して欲しいという話があった。西湘高校の先生とは、昨年から連携が始まっており、そういったところから、その他の高校にも広まって、アクセスも増えていくと思う。広報紙以外にも、目に触れるような仕組みを作していきたい。

勝川委員：学校との連携に関連して。私の職場は、箱根町の学校で、隣接する市区町村の学校や私立だと小田原市在住ではない生徒が多数居る。例えば隣接する市区町村の公立や私立の学校に、学校単位の登録ができ、生徒の学籍番号でアクセスできるとかの運用ができれば、もっと利用者の幅が広がると思う。それは難しいのか。

図書館長：電子書籍サービスは、小田原市在住・在勤・在学の方が対象である。したがって、市内の学校に市外から通う方は、在学なので対象になるが、市外にお住まいの方が

市外の学校に通学している場合は、対象外となる。電子書籍のサービスを提供する事業者との取り決めで、サービスエリアを制限している。いろいろなチャンネルで知っていただく取組は進めたいので、工夫していきたい。

加藤委員：1頁目、子どもの読書活動の意義の5段落目、「多様で刺激的なコンテンツ・・・」の件、「忙しく日常を送る子ども達にとって、主体的に自分自身と向き合うことができる貴重な時間でもある」の記述は、まさにそのとおりと思う。私は小学校の教師なので、子ども達に、本の魅力を知って欲しいと思うことが多いが、子どもは、きっかけを作ってあげたり時間を取ってあげたりすれば、本を手にとることって割と多いと感じる。きっかけは何でも良いと思うが、例えば、コンクールに挑戦しよう、だからちょっと本を読んでみようというきっかけでも良いし、学校としては、読書週間を設定し、読書活動の日常化を目指しているが、きっかけを持った子ども達が図書室に足を運んだり、本を手にとったりする機会が少しでも増えると良いと思う。

あとは、私たち大人が、本を読む姿を子ども達に見せることも大事だと思う。現在、クロームブックは子ども達に1人に1台に行き渡っており、持ってきて良いと言うと、子ども達はすごく喜ぶが、同じように、図書室に行って本を持ってきて良いと言っても、中々そうはいかないような実態となっている。そこで学校としては、朝読書も続けているが、先生達に朝読書の時に、先生達もちゃんと本を読むようにお願いし、丸付けしたりせず、先生達も一緒に本を読み、先生は何を読んでいるの？なんて、そんな会話が日常的にできるようにしようと言っている。家庭の場合は、お父さんお母さんが静かに本を読む、そういう時間を過ごす家庭がどのぐらいあるのか、スマホを触っている家庭の方が多いのではないのかと思うと残念。まずは、大人がそういう姿を見せることと、そういう時間、きっかけを敢えて取ることが大事だと、計画を読み、思った。

松本委員：最初の本との出会いがとても大切だと思う。子どもの3歳児健診の時、いただいた本を破れるぐらいまで読んでいたことが印象に残っている。最初は、どんな形であったとしても、本の楽しさを大人が伝えるように、何かしら工夫する必要がある。我が家の場合は、仕掛け絵本が好きで、最初はそればかり読んでいたが、いつの間にか、読む本に変わっていったので、最初のきっかけを提供することが良いと思う。

馬見塚委員：10頁のところで質問する。家読のところ家読カードといったツールを考えているか。素晴らしく、良いことだと思うが、現在は、親子でカードをやりとりすることは難しく、どれだけの家庭が取り組んでくれるのか疑問である。親子で完結するよりも、何かこのようなものを書いてもらうのであれば、外部に発信できるような、読書感想の一言をサイトにアップする仕組みがあれば、他の人を見て、その本を読んでみようみたいなことに繋がる、そのような広がりが出てくると感じた。

ブックリストについては、これもとても良いことだと思う。これを作成される時、発達段階に応じたブックリストとの記載があるが、小さい子達は、ちょっとした月齢の差で、響く本、響かない本も変わってくるので、その辺りを慎重に作られると良い。

あともう1点、14ページの幼稚園やこども園、保育所などの部分で、2行目の絵本コーナー等の設置や、図書館の団体貸し出しを利用し、保護者や園児の読書環境を整えとの記載があるが、図書館の施策として、絵本コーナーを設置するということか。

植田副課長：保育園には現在は配本していないが、絵本のコーナーを設けたいと考えている。

また、団体貸し出しについても、PRをして、貸し出しができるような形を採っていきたい。

馬見塚委員：絵本コーナーがない園があれば、そこに絵本コーナーを設置するということか。

図書館長：今も保育園では、お迎えの時に子どもが見ることができるようにと、絵本を置いてあるようなコーナーがあると思う。絵本コーナーの設置場所は、図書館ではなく、園の中を想定しているが、相手側の都合があるので、図書館は配本を行うとか、団体貸し出しの枠組みの中で行うことを考えている。配本については、借りに来てもらうことになるかもしれないが、保育園の集まりがあるので、方法について投げ掛けをしてから相談に乗るような動きになる。具体的に図書館が費用を負担して設置するのではなく、どちらかというと園の主体的、自主的な動きを、様々な形で支援することを想定している。

馬見塚委員：絵本コーナーに置く本を貸し、団体貸し出しを行うことと理解した。

長谷川委員：後ろの方にあるアンケートを、非常に興味深く読んだ。皆さんの意見から思った事は、まず、23頁、24頁に、幼稚園の保護者の方に聞かれているアンケートで、23頁の⑤で、「読み聞かせをしない理由」についての問いに、「忙しい」が4割ぐらい、「読む本がわからない」と言った理由が大多数を占めている。24頁の⑥には、「あなた自身は読書をされているか」の問いに対し、「読書はしない」が50%で、親の世代の2人に1人ぐらいが、読書してないということが、如実にアンケートに表れている。

先程、加藤委員が言ったように、親が読書する姿を、子どもに見せていない。これは、私も当てはまるかもしれないが、見せていないのかなと思う。スマホばかりいじっていると、子どももやっぱりスマホばかりいじるといような状態になってしまうと思う。

それに反して、子ども達へのアンケートで、例えば36頁に、小・中の学生に、「本を読むことは好きですか」というアンケートの結果は、「好き」という答えが4割から5割ぐらい。好きと答えるお子さんが多く、好きでも嫌いでもないというお子さんも

かなり多くて、逆に「嫌い」というのが10%くらいしかいない。意外と、子どもは本を読むのが好きということが、このアンケート結果から分かった。

次に、アンケート結果の中で「読みたい本がない」については、例えば30頁に、中学生に、「本を読まないのはなぜですか」という問いには、「勉強や習い事があって忙しい」という答えもあるが、「読みたい本がない」と答えたのが54.4%であった。先程、ブックリストの話があったが、読みたい本がないというよりも、何を読めば良いのかわからないと、子ども達は思っている。実際に、大人も、どんな本を読めば良いのかと自分でも思うことがある。図書館や書店で出会った本を、手に取り良いと思い買うこともあるが、小遣いの中で書籍を買うのは高いと思い、借りることも多い。おそらく、多くある蔵書の中で、どれを選んでいいかわからないので、「読みたい本がない」と答えているのかと思う。ブックリストや、ビブリオバトルも施策として、本の紹介の取組があると、お薦めの本を読んでみようと思うのかなと思った。

28頁に、「家で本を読んで、本について親子で話し合っていますか」の問いで、「よくしている」は1割くらいで、「時々している」が4割、「していない」が半分くらい。本の感想を伝えることや、本の内容について親子で共有することが、出来ていないのは、親も子どもも忙しく、共通の時間が取れないのかなと、このアンケート結果から思った。

副委員長：11頁の家庭教育講座との連携で、社会教育の一環の開かれる家庭教育講座とは、どのことを指すのか。

植田副館長：生涯学習の担当課において、家庭教育講座を開催していることから、この読書計画に定める項目も連携して強化していきたいと考えている。

副委員長：家庭教育講座に読書に係る講座があるのか。

図書館長：家庭教育講座は、生涯学習課がテーマを設定し実施しているが、子ども読書の内容の講座を継続的に実施はしていない。生涯学習課と図書館は同じ文化部で、事業の関連があるので、いろいろな形で連携を取りたい。具体的に何をどのようにするかについては、これから探っていきたいと考えている。

副委員長：それぞれの立場の方が、子どもの読書活動、大人の読書活動も推進できることに繋がる内容だと思う。それぞれの立場で実施することの連携や、そのような意識を持っていくようなうねりを、図書館が発信していただければすごく嬉しい。

委員長：ここまでの皆さんのご意見等を伺って、11頁の家庭教育講座との連携については、継続的にこれから取り組んでいくとの説明を受けて良く分かった。ここに挙がっている項目で新規の要素は、多分、電子図書館の活用だろう。最終的に計画が決定し、概要版のようなものを作る時には、新規の要素は何かというのが分かるように示し、これまでの継続の要素、新しい計画にプラスした要素が伝わると良いと思う。それから、

2頁の冒頭の「子ども」だが、法律もひらがな、市の計画もひらがなだが、国の計画は「子供」と漢字で表記している。文科省は「子供」を漢字で書くのが省内ルールらしく、法律はひらがなで、国の計画は漢字で表記するのが正しいので、漢字にした方がよい。今、第5次計画の策定に、関わっており、何で漢字なのかと聞いたところ、省の中の取決めと言っていた。国の計画名を示す時だけ注意が必要で、漢字で表記することが正しい。

中身に関わることで、1つこういう要素もあったらどうかという提案で、16頁の最後の6番の項目の人材育成で、これに関しての要素として、図書館員の資質向上とあるが、学校の司書教諭、学校司書の資質向上も必要な要素ではないかと思う。加藤委員が会長をされている学校図書館協議会でも研修会など、既にあるものを、図書館と連携を図るとか、あるいは学校司書の研修体制は、どうなっているのかも気になるところ。それは教育委員会の部局が実施していると思うが、図書館との連携の視点を入れられたら良い。中央図書館職員の資質向上だけでなく、学校職員、子どもの読書するシーンは、市の図書館だけでできることではないので、学校側の部分もバックアップする要素を、入れていただけると良い。

北 河 委 員：委員長の発言の学校司書の資質向上に関連して、私は中学校に関係しているが、図書室に行くと、司書が代わると図書の展示が変わる。とても勉強されている方は、子ども達がいろいろな興味を引くように、たくさんの本を展示してくれる。勉強をされている方と勉強をされていない方、興味、熱量がある方とそうでない方は、図書室が全然違う。学校の方針等も関係すると思うが、子どもへの対応も違っている。図書委員の方と司書の連携が取れている図書室は、とても雰囲気良く、明るく、展示がたくさんあり、興味を引く内容となっている。私は、学校図書の司書によって、子どもの図書や読書に影響されると思ったので、司書の教育も要素に考えていただきたい。

加 藤 委 員：関連して、学校司書にもすごく影響を受けるし、副委員長のようなボランティアの影響も大きい。教室の方に直接入り込んで本を読んでくれ、ボランティア達の研修も活発になれば良いと思う。本校のボランティアは熱心で、この前も落花生の本を読んだ時に、家の畑から落花生を持ってきて、実物を見せ、話をした方もいた。すると子ども達が影響を受けて、畑に見にいっていたので、ボランティアの資質向上の要素も入ると良い。

委 員 長：12頁にボランティア団体との連携と支援に、その辺りの要素はあるが、私が言った学校司書とかの研修のサポートのような部分は、入っていないかなと思い発言した。図書館の所管事業じゃないが、図書館が単独で行うというより、所管する部署と図書館の連携という視点を入れていただけると良い。

馬見塚委員：大人の読書については、アマゾンの本の売り方はすごく参考になると思う。例えば、書評、レビューの欄は、誰にも強制されなくても、書き込みが増えていく。そういったものを見て、評価が良いものを購入するとかの循環が生まれているので、何かそういったところを、真似できるところもあると感じている。

（３）図書館を使った調べる学習コンクールの審査員の推薦について【資料１ 12 頁】

○事務局説明（資料に基づき石川副館長より説明）

- ・勝川委員を選出

９ その他

（１）図書館関連の情報について（図書館長）

- ・北原白秋没後 80 年記念事業及び電子図書館サービスの開始について紹介

（２）事務連絡（石塚副館長）

- ・次回の協議会は２月頃に開催予定。

委員長：第１回の図書館協議会を終了する。